

見る人ごとにかけてしのはめ

音のみも名のみも聞きてともぶるがね



村 関歩「二上山」(墨画 高岡市立万葉小学校蔵)



岡田繁憲「立山」(田本画・新作)

ふたがみやま
二上山の賦一首 二上山は射水郡に有り

射水河 に行きめぐれる
玉くづけ 二上山は
春花の 咲ける盛り
秋の葉の 色づく時
出で立ちて ぶりけ見れば
神からや そは貴き
山からや 見が欲しからむ
すめ神の 裾廻の石の
波路の 崎の荒磯に
朝なきに 寄する白波
夕なきに 満ち来る潮の
いづれに 絶ゆるはななく
いづれに 今をいつ
かくしそ 見る人ごと
かけてしはめ

射水川がふもとをめぐって流れている
(たまぐづけ)二上山は、

春花の盛りの時も、
秋の葉の色づく時にも、
外に出て振り仰いで見ると、
この山の神性ゆえにあんなにも貴いのだらうか、
山のもつ品格のせいで見たくてならぬのだらうか。
だからこそ、国の神の鎮まる山のふもとに
波路の崎の荒磯に、
朝なきのときにつち寄せる白波や、
夕なきのとき満ちくる潮のやうに、
いづれにすすす絶ゆるはななく、
いづれに昔から今に至るまでいつと、
こんなにも見る人すべてが、
この山を心にかけてほめたえゆるのだらう。

波路の崎の荒磯に 寄する白波

波路の崎の荒磯に つち寄せる波のやうに、いづれに、いづれに、海に昔のいつとが、このはれる。

玉くづけ 二上山に 鳴く鳥の 声の盛りに 時は来にけり

(たまぐづけ)二上山に鳴く鳥の声が恋しくなるなむ時が、いつといつとてきた。

右 三月三十日、興に依りて作る 大伴宿禰家持

たちやま
立山の賦一首 井せ短歌 二上山は新川郡にあり

天さがる 都に名かかす
越の甲 国内にも
山はまあ、ひじりて 数々あり、
川はまあ、たくさを流れて、
すめ神の 裾廻の石の
新川の その立山
常夏に 雪降り積もて、
帯はせる 片見川の
清き瀬に 朝夕いつ
立し霧の 思ひ過きや
あり通ひ 一年の
よそのもも ぶりけ見
万代の 語りくせと、
いまだ見ぬ 人にも告げむ
音のみも 名のみも聞きて
ともぶるがね

(あまたさがる)都の地のなかでも高く
越中の国中のこだまのうしろ、
山はまあ、ひじりて数々あり、
川はまあ、たくさを流れて、
国の神が鎮座されて、
新川郡のその名も高き立山は、
夏いつ雪が降り積もて、
山裾を流れる片見川の
清らかな瀬に朝夕いつ
立し霧のやうに、この山を流れるいつとて、
すつと通ひいつて、毎年毎年、
遠くからでも仰ぎ見て、
万代の語りくせと、
まだ見たことのない人にも話そう。
噂だけでも名前だけでも聞いて、
つちやまじが、いつと。

立山に降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神からなりて

立山に降り置ける雪は、夏の間見ても見あきることがない。神の山だからにちがいない。

片見の川の瀬清く 行く水の 絶ゆるはななく あり通ひ見む

片見の川の瀬も清く流れゆく水のやうに、絶えることなくすつと通ひ続けるこの山を見よう。

四月二十七日、大伴宿禰家持作る



上：権幸文「煙」漆パネル・富県立高岡西高等学校蔵
下：権幸文「雪山に映える」漆パネル・富県人社蔵

賦(ふ)

賦」とは、中国の古い韻文の文体の名で、事物を叙述描写し、対句を多様した修辭にすぐれた美文。

大伴家持は、越中の山水を讚える3組の長歌を作り初めて「賦」と称した(「二上山の賦」「布勢の水海遊覧の賦」「立山の賦」)。これらを「越中三賦」と呼んでいる。

すめ神(すめかみ)

「すめ」は「統べる」の意味の接頭語。その地域を領する最高位の神のこと。

そこから転じて、神々を尊んで言う場合や、皇室の祖先神をさすこともある。